

モモせん孔細菌病の多発生地における 効果的な防除対策技術の開発

公益社団法人福島県植物防疫協会
常務理事兼事務局長

尾形 正 (おがた ただし)

近年、我が国のモモ産地ではせん孔細菌病が多発生し問題となっている。福島県では本病の発生により、収穫皆無に近い園地の事例も認められ問題となっており、昨年は本病に対して春から病害虫発生予察情報として3回の注意報を発表し、本年もすでに2回発表する事態となっている。

国内におけるモモ産地は比較的限られているが、その生産阻害要因の一つにせん孔細菌病の発生があげられよう。本病は発生の激しさ(図-3～6)と防除の難しさから作柄に大きく影響するため、この病害を克服できなければ新たな産地化や産地維持は困難である。これまで本病防除方法の開発にかかわってきた研究者の成果においても、個別に有効な防除対策はあげられてはいるものの、薬剤による防除では限界があり、耕種的対策を組合せた総合的防除の実践が極めて重要であることが知られている。このように生育期の薬剤による防除対策に限られるうえ、品種構成の変化、気候温暖化や担い手の高齢化等様々な要因が影響して、近年の多発生に結びついているものと考えられる。

現地研究会を開催

こうした中、去る7月2～3日に福島県農業総合センター果樹研究所を中心会場に、「モモせん孔細菌病の防除対策現地研究会」が開催された。現地研究会1日目は、試験研究担当職員による県北地方2箇所の発生圃場を視察し、その発生状況を視察した(図-1)。

2日目(7月3日)は公開の形で開催され、傍聴者を含め総勢約80名の研究会(図-2)となった。

研究会では農林水産省生産局園芸作物課の菱沼課長が行政の立場から平成26年度の福島県での本病の発生状況に対する認識と関係対策事業の活用について、また農林水産技術会議事務局の中谷研究統括官は、その後採択のあった農食事業の「緊急対応研究課題」の公募について情報提供を行った。引き続き参加各県(福島、山形、新潟、山梨、長野、愛知、和歌山、岡山)から発生状況および防除対策について報告があり、農研機構果樹研究所の末貞主任研究員からは本病抵抗性品種育成素材は確認されていないが、モモ品種‘もちづき’は比較的発病しにくいとの報告がなされた。

防除対策に関する話題は青森県と愛知県から提供され



図-1 現地視察会



図-2 現地研究会